

Miyagi University Research Journal

コロナ禍における老年看護学実習プログラムの有用性の検討

Usefulness of a Practical Training Program for Gerontological Nursing amid the Covid-19 Pandemic

成澤健, 沢田淳子, 徳永しほ, 大橋幸恵, 出貝裕子, 大塚真理子

Ken Narisawa, Atsuko Sawada, Shiho Tokunaga, Yukie Ohashi, Yuko Degai, and Mariko Otsuka.

宮城大学看護学群

School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】

コロナ禍, 老年看護学実習, 実習プログラム, 実習到達目標, リフレクション
Covid-19 pandemic, gerontological nursing practice, practical training program, practical training attainment objectives, reflection

【Correspondence】

成澤健
宮城大学看護学群
narisawk@myu.ac.jp

【COI】

本論文に関して, 開示すべき利益相反関連事項はない。

Received 2021.6.13

Accepted 2021.8.9

Abstract

As nurse educators, we examined the usefulness of gerontological nursing practitioner programs that combined short-term onsite training, on-campus training, and online learning as gerontological nursing training provided to nursing students under the COVID-19 pandemic. The training programs, which aimed to attain the same objectives as those of the previous year, included onsite training, which unveiled the "development of nursing processes;" on-campus training, whereby "simulation exercise" and "INTO Intensive Care Homes for the Elderly" were offered using paper cases; and online learning, which included "video viewing and group work." This paper summarized and examined the opinions of six faculty members in charge of the program on their efforts and perceptions of the program, as well as the academic progress of the program participants. Throughout this training program, the faculty members tried to help students "secure time for self-reflection while enhancing the program contents," and assisted them in achieving their learning objectives through "involvement with a focus on connections between the programs," and "involvement with a focus on deepening the learning." In terms of students' academic progress, "their academic attitude was equal to those of past students," and showed "positive attitudes toward learning," and "high levels of concentration and flexibility." With its emphasis on self-reflection, this training program, which consisted of various components, had the benefit of offering a learning environment in which students can easily participate and proved useful as an educational method designed to help students who were prepared in gerontological nursing practice to achieve their learning objectives.

Miyagi University Research Journal

はじめに

2020 年 2 月に文部科学省および厚生労働省から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」[1] が打ち出され、全国の看護系大学では臨地での実習時間短縮や実習中止等が生じた際の対応が継続されている。同年 6 月には、「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について」[2] が示され、対象との関係構築のためには、臨地における連続した実習時間の確保が望ましいが、実習施設の状況により困難な場合は、臨地での実習の前後に学内において対象の理解を深められるような演習を実施するなど、臨地に滞在する時間が短縮されても学修目標が達成されるよう計画することが求められた。さらに、多様な場における支援等の活動を利用した学習や学内での演習で臨地における実践を代替する際は、その前後での事前学習及び振り返りを十分に実施することが求められた。

本学の老年看護学実習は、3 年次後期開講 3 単位の科目である。約 100 名の学生が 6 クールに分かれて実習を行うため、教員は、3 単位 1 クールの実習（約 15 名の学生が 15 日間で実習）を 6 回運営することになる。2019 年度までは、1 クールあたり 12 日間の臨地実習と、初日オリエンテーション及び最終 2 日間のまとめを学内で行う実習プログラムであった。しかし、2020 年度は、学生の実習受け入れ中止の施設があり、受け入れ可能な施設に限られることとなった。さらに、新型コロナウイルス感染症の蔓延状況によっては臨地実習が中止となることも想定された。そこで、臨地での実習時間が短縮あるいは確保できない状況下においても、学生の実習目標到達状況を保つための実習プログラムを検討し、15 日間の実習プログラムに臨地実習と学内実習、オンライン学習を組み合わせさせて実施した。

本稿は、コロナ禍で従来の老年看護学実習が困難となった中、数日の臨地実習、学内実習およびオンライン学習を組み合わせさせて実施した実習プログラムについて、看護教員の立場から教育方法としての有用性について検討することを目的とした。

実習プログラムの概要

老年看護学実習では、学生が多様な療養の場における高齢者の特性の理解、老年看護の特性の理解を踏まえ、老年看護に必要な基礎的実践能力を修得し、自己の看護実践上の課題と今後のあり方を検討することを目的として実習目標を設けている（表 1）。この実習目標を達成するために、実習プログラムは臨地実習、学内実習、オンライン学習を組み合わせで構成した。臨地における実践は、対象の特性にあわせて看護技術を実践する機会であることから、学内での演習により代替する場合は、日々変化する患者の状態をアセスメントする演習や患者とのコミュニケーション能力を養う演習等、可能な限り臨地に近い状況の設定をし、演習を行うことが留意点に挙げられている [2]。この留意点を踏まえ、老年看護学実習では臨地実習の前後で様々な教材を用いて多様なプログラムを実施することで、学生が実習目標に到達しうる実習プログラムを作成した。さらに、看護実践において省察が重要であるとされており [3]、それぞれのプログラムの中で、教員と学生で体験を省察するリフレクションあるいは学生自身で体験を省察するリフレクションの時間を含めるものとした。また、臨地実習については、1 クールに 2 施設が受け入れ可能であることから、1 施設の実習期間を 15 日間の前半と後半の 2 回に分け、1 クールで 4 グループの学生が 5 ～ 8 日間の臨地実習に臨めるよう配置した。1 クールの実習プログラム例を表 2 に示す。

Miyagi University Research Journal

表 1 老年看護学実習の実習目的と実習目標

<p>【実習目的】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 多様な療養の場で生活をしている高齢者の特性を理解する。 2. 多様な療養の場での老年看護の特性を理解する。 3. 高齢者の特性や療養の場の特性に応じた老年看護に必要な基礎的実践能力を習得する。 4. 実習を通じて、自己の看護実践上の課題と今後のあり方を検討する。
<p>【実習目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習全体を通しての目標 <ol style="list-style-type: none"> 1) 実習を通じて、高齢者、および老年看護に対する自己の見方・考え方（高齢者観、老年看護観）を明らかにできる。 2) 実習を通じて、自己の看護実践上の課題と、今後必要な取り組みを検討できる。 2. 対象特性実習の目標 <ol style="list-style-type: none"> 1) 特別養護老人ホーム <ol style="list-style-type: none"> (1) 高齢者が療養生活をしている施設について説明できる。 (2) 施設で生活をしている高齢者とその家族について理解できる。 2) 外来 <ol style="list-style-type: none"> (1) 高齢者が通院している施設の外来機能、および看護の役割や機能について説明できる。 (2) 外来通院をしている高齢者とその家族について理解できる。 3. 看護過程展開実習の目標 <ol style="list-style-type: none"> 1) 老年期にある人の特徴を捉え、総合的に理解できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 高齢者、およびその家族と適切な人間関係を構築するために、良好かつ必要なコミュニケーションをとることができる。 (2) 様々な老性変化や健康障害に伴う生活機能の変化について理解できる。 (3) 高齢者を個々特有の人生経験を有している一人の人として理解し、受け持ち高齢者のその人らしさを説明できる。 (4) 高齢者とその家族、および高齢者を取り巻く人々との関係を捉え、影響しあう関係について理解できる。 2) 医療施設、あるいは介護老人保健施設で治療・ケアを受けている高齢者とその家族を対象に、看護過程の展開ができる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 高齢者とその家族の生活を含めた、身体的、心理的、社会的状態を捉え、「看護ケアが必要な状態」を判断できる。 (2) 「看護ケアが必要な状態」に対し、根拠を明確にした上で、個性性を踏まえた具体的な計画を立案できる。 (3) 看護計画を実施し、一連の看護援助を振り返り、根拠を踏まえて、評価できる。 (4) 高齢者がより豊かに生活を継続するための視点をもって計画修正ができる。 3) 高齢者とその家族を対象に看護過程を展開する中で、看護実践における他の専門職と連携、協働するための方法を理解できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 看護過程を展開する中で、看護職との共通性、および相違性を踏まえて施設内外の他の専門職を理解し、連携・協働する看護計画が立案できる。 (2) 看護職が行っている多職種との連携と協働、および実践の場で行われている多職種連携を通して、看護の役割や機能について理解できる。 (3) 医療施設、あるいは介護老人保健施設で行われている専門職連携実践（I P W : Interprofessional work）を通して、連携と協働のための知識・技術・態度が理解できる。 4) 高齢者が生活している療養の場の特徴を理解できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 療養の場（人的・物的・制度的環境）が、療養生活をしている高齢者に与える影響について理解できる。 (2) 高齢者のより豊かな生活を維持するための、継続的な支援方法、およびその体制について考察できる。

表 2 1 クールの実習プログラム例

グループ		Aグループ／Bグループ		Cグループ／Dグループ	
実習施設		病院A(前半)／老健B(前半)		病院A(後半)／老健B(後半)	
時間		AM	PM	AM	PM
1日目	月	・全体オリ ・個別面談	看護過程展開① アセスメント	・全体オリ ・個別面談	
2日目	火	看護過程展開② アセスメント		外来の動画視聴とGW	
3日目	水	看護過程展開③ アセスメント		特養の動画視聴とGW	
4日目	木	看護過程展開④ ケアの方向性の明確化/中間カンファレンス		INTO 特養とGW	
5日目	金	看護過程展開⑤ 計画立案		・事前課題アセスメント指導 ・シミュレーションの状況設定検討	
6日目	月	看護過程展開⑥ 実施評価		シミュレーション ・実施評価	シミュレーションの 振り返り
7日目	火	看護過程展開⑦ 実施評価/最終カンファレンス		施設オリ アセスメント指導	自己学習
8日目	水	記録整理		看護過程展開① アセスメント	
9日目	木	アセスメント・実施評価指導		看護過程展開② アセスメント	
10日目	金	アセスメント・実施評価指導		看護過程展開③ ケアの方向性の明確化/中間カンファレンス	
11日目	月	外来の動画視聴とGW		看護過程展開④ 計画立案	
12日目	火	特養の動画視聴とGW		看護過程展開⑤ 実施評価	
13日目	水	INTO 特養とGW		看護過程展開⑥ 実施評価	
14日目	木	GW・自己学習		看護過程展開⑦ 実施評価/最終カンファレンス	
15日目	金	GW： 実習全体の振り返り	個別面談	GW： 実習全体の振り返り	個別面談

臨地実習	学内実習	オンライン学習
------	------	---------

1) 臨地実習

臨地実習は、医療施設もしくは介護老人保健施設で、1～2名の学生が1名の高齢者を受け持ち、看護過程を展開した。2020年度の実習計画時の学生1名あたりの臨地実習期間は5～8日間であった。高齢者の特性や療養の場の特性に応じた老年看護に必要な基礎的実践能力を修得するためのプログラムであった。

2) 学内実習

(1) 事前課題で看護過程を展開した紙上事例を用いたシミュレーション演習

老年看護学実習では学生に事前課題として、紙上事例を用いて看護計画の立案までを課している。学内実習では学生が立案した看護計画を基に、学生が状況設定をして実施評価する「シミュレーション演習」を取り入れた。学生が設定した状況下で、教員が高齢者役となり、実践する学生以外の学生は観察者となった。シミュレーションする状況の設定、シミュレーションの実施と評価、シ

Miyagi University Research Journal

ミュレーション場面の振り返りを含め1日間のプログラムである。その場での振り返りと動画撮影したシミュレーション場面を視聴しグループ全体の振り返りを行った。グループ全体の振り返りは、演習室での3密を回避するためにオンライン学習に切り替えることもあった。

「シミュレーション演習」は、臨地実習が実習期間の後半にスケジュールされている学生にとって有効であり、臨地実習を想定して高齢者とのコミュニケーションや具体的な看護技術を修得するためのプログラムであり、臨地実習の準備演習となるプログラムであった[4]。

(2) INTO 特養

「INTO 特養」は、学生自身が高齢者になったことを想定して、偶発的なエピソードを経時的に体験しながら、特別養護老人ホーム（以下、特養）に入所するまでの高齢者の体験を疑似的に体験するもので、筆者らが独自に開発したプログラムである[5]。学生は、高齢者役と介助者兼観察者役でペアを組み実施した。エピソードが記載されたカードを無作為に引き、カードに記載された偶発的な体験を特養に入居するまで繰り返した。特養に入居するまでの体験は、自身の病気発症や配偶者の喪失体験など、老年期に想定される出来事の体験であり、老年期を生きる高齢者一人ひとりの物語として、その人に関する理解を促すプログラムであった。「INTO 特養」は、体験とそのリフレクションを1日間で実施した。

3) オンライン学習

昨年度までの対象特性実習は、特養と外来が実習施設である。コロナ禍では特養にも外来にも出向くことができないために、それを補うものとして、教員が作成したオリジナルの動画教材を用いたオンライン学習を準備した。オンライン学習は「動画視聴とグループワーク」であり、特養と外来それぞれ1日間での実施とした。午前中に、特養あるいは外来の動画を視聴し、その機能と役割、看護実践について個人ワークで記録整理を行い、それを基に、午後のグループワークに臨む内容とした。

研究方法

1) データ収集方法

老年看護学実習を担当した6名の教員を対象に、「多様なプログラムで構成した実習プログラムについて感じたこと・思ったこと、取り組んだこと・工夫したこと」、「教員からみた学生の実習目標到達状況や学習態度と思われる学生の実習に臨む様子」について、Microsoft Teams上に意見集約用のExcelファイルをアップロードし、実習プログラムに関する意見を担当教員の都合の良い時間に、自由に無記名で入力してもらった。なお、データ収集期間は、実習終了後、2021年2月の約2週間であった。

2) データ分析方法

得られた意見を、「実習プログラムについての認識や取組」、「教員がとらえた学生の実習目標到達状況や学習態度」に関する記述内容を記録単位として、類似性に基づき分類して検討した。

3) 倫理的配慮

本稿に取り組むにあたり、老年看護学実習の担当教員が、自分たちが行った実習プログラムの実施状況について検討するものであり、検討内容や教育内容が教員として評価されるものではないことを確認し、実践報告として公表する旨の同意を得た。意見を集約する際には、個人が特定されないように無記名で行った。また、学生の記録物や言動など固有の情報は取り扱わないものとした。

結果

1) 多様なプログラムで構成した実習プログラムに関する教員の認識と取組

今回の実習プログラムに関する教員の認識と取組として、【リフレクションの時間確保と内容の充実】や【プログラム同士のつながりを意識した関わり】、【学びの深化を意識した関わり】、【自由度が高い実習プログラムの活用】などの6項目が得られた（表3）。【プログラム同士のつながりを意

識した関わり】としては、「学内実習とオンライン学習での学びが臨地にどのようにつながるかをイメージできるような関わり」や「学生が現時点で体験して考えたことを、前のプログラムでの体験に置き換えて振り返り、前のプログラムでの学びが深められるように関わった」など「各プログラムでの学びが単発にならないようにつながりを持たせる関わり」があった。また、【自由度が高い実習プログラムの活用】としては、「オンラインでの実習プログラムで学生個々が自身のペースで学習を進めることができる」や「急遽、臨地実習に臨めなくなった学生について、他のプログラムとの組み合わせを変更し、目標の到達を支援した」など、学生視点でのプログラムの活用、教員視点でのプログラムの活用に関する意見がみられた。

表3 多様なプログラムで構成した実習プログラムに関する教員の認識と取組

項目	教員が感じたこと・思ったこと、取り組んだこと・工夫したこと
リフレクションの時間確保と内容の充実	グループでのディスカッションの時間がしっかりとれ、内容も深めることができた
	グループでのディスカッションの時間がしっかりとれ、リフレクションがしっかりとれた
	個々の学生とのリフレクションがしっかりとれた
プログラム同士のつながりを意識した関わり	学内実習とオンライン学習のプログラム後に臨地実習に臨むグループでは、学内実習とオンライン学習での学びが臨地にどのようにつながるのかをイメージできるように関わった
	学生が現時点で体験して考えたことを、前のプログラムでの体験に置き換えて振り返り、前のプログラムでの学びが深められるように関わった
	受け持つグループの、臨地、学内、オンラインの組み合わせ状況（順番）によって、教材は同じであっても使い方やGWで投げかける質問や紹介する具体的な事例を変化させた
	各プログラムでの学びが単発にならないようにつながりを持たせる関わりが必要
学びの深化を意識した関わり	学生の意欲への働きかけ、具体と概念をリンクさせることで興味を持ち、記憶に残るような働きかけ、学生の思考を拡大したり疑問を持つことへの働きかけにつなげようとした
自由度が高い実習プログラムの活用	オンラインでの実習プログラムだと移動に要する時間を課外学習の時間として使用できる
	オンラインでの実習プログラムで学生個々が自身のペースで学習を進めることができる
	学生が自身の学習上の特徴に合わせて、オンラインまたは対面での指導を自己選択できる
	急遽、臨地実習に臨めなくなった学生について、他のプログラムとの組み合わせを変更し、目標の到達を支援した
変化の中でも学生が取り組みやすい学修環境の整備	状況の変化によって予定を変更せざるを得ないときは、選択のプロセスに学生を巻き込み、教員を含めグループ全体で決定しながら進んでいるという認識が学生の中に持てるように努め、教員やグループメンバーとの信頼関係の構築を図った
	状況の変化によって予定を変更せざるを得ないときは、選択のプロセスに学生を巻き込み、教員を含めグループ全体で決定しながら進んでいるという認識が学生の中に持てるように努め、自己学習や実習への意欲の保持などを図った
実習プログラムの今後の課題	学生のこれまでの基本的な知識や高齢者との関わり状況によってイメージ化が難しいようで、学修意欲を高める難しさを感じた
	自身で学習課題を見つけるのが難しい状況の学生もあり、個人での作業とグループ活動での作業目的をより明確にしていけることが必要だ
	スケジュールによって最終プログラムのリフレクションの時間を十分に確保できないグループがあった。
	認知症を持つ高齢者とのコミュニケーションや認知症を持つ方への支援を経験させたい

2) 教員からみた学生の実習到達状況と学習態度

教員からみた学生の実習目標到達状況について、「この多様な実習プログラムを実施したことで、昨年度の目標よりも低くすることなく実習目標に到達できた」という意見があり、昨年度と同程度の実習目標の到達状況であることが確認された。教員からみた学生の学習態度については、【取り組む姿勢は過去の学生と同等】であるということだけでなく、「臨地実習の期間が短く臨地での学生の集中度が増しており、短い実習期間だからこそ1日目から積極的に指導者や対象者に向かっていた」様子から【学びを得ようとする積極的な姿勢】を感じ取っていた。さらに、【集中度の高まりと柔軟な対応】ができていた（表4）。なお、2020年度の老年看護学実習を履修し、本実習プログラムに臨んだ全学生は、実習単位を取得した。

表4 教員からみた学生の学習態度

項目	教員が感じたこと・思ったこと
取り組む姿勢は過去の学生と同等	学生のカンファレンスやグループワークに取り組む姿勢は、過去の学生と同等に感じる
	課外学習時間は、過去の学生と同等に感じる
学びを得ようとする積極的な姿勢	臨地実習の期間が短く臨地での学生の集中度が増しており、短い実習期間だからこそ1日目から積極的に指導者や対象者に向かっていた
	学生によっては動画教材から自分自身で学習課題を見つけ取り組んでいた
集中度の高まりと柔軟な対応	学生は、臨地実習の期間が短く臨地での集中度が増しており、状況の変化に柔軟に対応できていた

考察

2020年度の老年看護学実習は、コロナ禍による臨地実習の制限のなか、臨地実習、学内実習、オンライン学習を組み合わせた多様な実習プログラムであった。臨地に出向く日数が例年よりも少なかったものの、学生の目標到達状況は例年に引けを取るものではなく、逆に、制限の中で学びを得ようとする学生の積極的な姿勢や、集中度が高まり柔軟な対応ができていたと教員は感じ取っていた。このような成果が得られた要因には、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックという非常事態であっても、実習プログラムを工夫し、学生の実習目標到達を支援するための教員の取組があったと考えられる。本実習プログラムが、老年看護学実習に臨む学生の目標到達のための教育方法として有用であったと考えられる要因について、以下に考察する。

1) リフレクションと教員の関わりによる学生の学びの深化

本実習プログラムで教員は、学生の【リフレクションの時間確保と内容の充実】を図り、【プログラム同士のつながりを意識した関わり】と【学びの深化を意識した関わり】を行っていた。三輪は、「自らの実践について他者に聴いてもらい、よい点や改善点についてアドバイスをもらうのは、教科書やマニュアルを通して看護実践を学ぶことよりも自らの看護実践には有効であろう」[3]と述べており、各プログラムでの体験を活用する際に、学生が自らの体験をリフレクションできる機会を確保することが重要となる。さらに、廣田らは、学生が展開した看護場面や受け持ち患者の状態等の看護現象といった教材を活用して看護に関する学生の理解を促進する教員の行動を示している[6]。本実習プログラムでは、各プログラムにグループディスカッションや個別に教員と体験を省察するリフレクションの機会を設けた。教員は、各プログラムでの学生の学びを確認しつつ、それらがつながりあって老年看護学としての学びになるよう意図的に学生指導を行っていた。このような関わりが、多様なプログラムを1つの老年看護学実習として結び付け、実習目標の到達を可能にしていたと考えられる。さらに、教員の学生の学びの深化を意識した関わりは、概念と具体的な事象を結びつける関わりであり、リフレクションの際に体験を実践知に深化させる一助となっていたと考えられる。

2) シミュレーション演習とINTO特養による臨地実習の充実

本実習プログラムでは、臨地実習と学内実習を組み合わせた。シミュレーションと臨地実習につい

Miyagi University Research Journal

て、臨地実習の代替えの工夫に、シミュレーションの「多様な場面に対する確実な基礎力の蓄積」という強みと、臨地実習の「人々に対する状況のなかでの看護実践能力の発揮」という強みを反映させること [7] や、シミュレーションが臨地実習の学習効果を高める [8] という報告がある。本プログラムのシミュレーション演習は臨地実習の充実に貢献したと考えられる。

学内実習として新たに開発した INTO 特養は、単なる高齢者疑似体験とは異なるが、高齢者疑似体験演習での学びが老年看護学実習での学びにつながっているという報告がある [9] [10]。本実習プログラムの INTO 特養については、さらに検討が必要である。

3) 学修環境を整えやすい実習プログラム

2020 年度後期の老年看護学実習では、臨地実習の日数が急遽、短縮となることもあったが、学内実習やオンライン学習を準備していたことで、状況の変化にその都度対応し、実習プログラムの再構成を図ることができた。廣田らは、看護学実習指導に携わる教員は、流動的に変化する病棟の状況に応じて実習計画を変更しつつ、学生の実習目標の到達を支援する能力が必要と述べている [6]。実習状況がより変化しやすいコロナ禍での看護学実習において、教員に求められる重要な能力の一つといえる。本実習プログラムは、急な実習計画の変更時に【自由度が高い実習プログラムの活用】が可能であり、臨機応変に対応しつつも実習目標実習プログラムの再構成により学生の実習目標到達の支援が図られていたと考えられる。

急な実習計画の変更時に、教員は学生と状況を共有し、考えられる実習方法の選択肢を学生に示し、学生と一緒に決定していた。高岡らは、「新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い」の中で、判断が難しい状況も含めて学生へのタイムリーな情報提供が課題であると述べている [12]。このような状況の中で教員の【変化の中でも学生が取り組みやすい学修環境の整備】が、学生の【集中度の高まりと柔軟な対応】を育んだのかもしれない。

新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の中には、移動も含め、臨地実習や学内実習で感染する不安や、他者に感染させてしまう不安を抱いている学生がいるという報告もある [12]。本学でも対面ではなくオンラインでの個別指導を希望する学生がおり、本実習プログラムは感染の不安を抱く学生への対応ともなった。また、学内実習やオンライン学習の利点は、個人での学習時間とグループディスカッションの時間を調整しやすいことである。本実習プログラムの学内実習とオンライン学習は、学生がある程度自分たちのペースで学習を進めることにつながっていたと思われる。

学習者の学習過程において、個人差を考慮した学習環境を構成していくことは教師にとって重要な仕事であるとされ [13]、このような個別の調整が図りやすい学内実習およびオンライン学習を組み込むことは、学生自身で取り組みやすい学修環境を整える一助となり得ると考えられた。

4) 今後の課題

本実習プログラムは、コロナ禍で必要に迫られて構成したものである。次年度以降の実習に、新型コロナウイルス感染症がどのように影響するかはわからないが、従来の実習に戻ることはなく、本実習プログラムで得られた成果をもとにコロナ後の実習プログラムを構成することが課題となる。臨地実習は、高齢者とのリアルな関わりを確保でき、臨地でしか得られないものがある。特に、「認知症高齢者とのコミュニケーションや重度化した要介護高齢者の身体的ケア」はシミュレーションでは限界がある。しかし、本実習プログラムで、シミュレーション演習や INTO 特養という学内実習を老年看護学実習に組み込むことで、実習の学習効果を高められる手ごたえを得ることができた。コロナ禍後の実習プログラムでは、双方のメリットを活かし、臨地実習にシミュレーション演習や INTO 特養という学内実習を組み合わせた実習プログラムを検討していく。

また、オンライン学習で、特養と外来に関する動画を用いたが、このような動画教材は、文字教材と比較して、話し手の表情や目線、声色といった話し手の印象を伝えられる特徴がある。認知症の高齢者と看護師が関わる場面を再現して動画にし、これをもとにしてシミュレーションを行う教育方法の検討も必要であろう。さらに、オンラインによる個別面接は新たな指導方法となった。学生にとっては、対面よりもオンラインの方が教員と話しやすいこともあるようであり、オンラインによる学生への個別

指導やリフレクション方法について、教員の教育力を高めることが課題である。

結論

コロナ禍の老年看護学実習において、臨地実習、学内実習、オンライン学習で構成した実習プログラムが有用であると考えられた。依然として、緊急事態宣言下の地域のあるコロナ禍が継続しているものの、ワクチン接種が進んでおり、コロナ禍の収束の兆しも出てきている。しかしながら、今後、コロナ禍に類似する情勢に直面する可能性は大いにあり得、コロナ禍における今回の取り組みは、今後の老年看護学教育における一教育方法として有意義な取り組みとなったものと思われる。本取り組みは、看護教員の視点での検討であるため、今後、学生の視点での分析を加え、実習プログラムのブラッシュアップを図っていきたいと考える。

Acknowledgment

本論文に関して、第26回老年看護学会学術集会で発表した内容について再検討したものであること、開示すべき利益相反関連事項はないことを申し添える。

文献

- [1] 厚生労働省, 「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係老年職種等の各学校, 養成所及び養成施設等の対応について」, 2021, <https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>, 2021年5月14日閲覧
- [2] 厚生労働省, 「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について」, 2021, <https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf>, 2021年5月14日閲覧
- [3] 三輪建二, 省察の実践者としての看護師とは—実践と省察のサイクル, 看護教育, 2008, 49 (5): p402-406
- [4] 大橋幸恵, 出貝裕子, 沢田淳子, 成澤健, 徳永しほ, 大塚真理子, コロナ禍の老年看護学実習に学内シミュレーションを取り入れた成果—教員の振り返りからみえたこと—, 日本老年看護学会第26回学術集会抄録集, 2021, p218
- [5] 沢田淳子, 徳永しほ, 成澤健, 大橋幸恵, 出貝裕子, 大塚真理子, コロナ禍における高齢者の特性を捉えるための学内実習プログラム—「INTO 特養」開発と実施—, 日本老年看護学会第26回学術集会抄録集, 2021, p216
- [6] 廣田登志子, 舟島なをみ, 杉森みどり, 実習目標達成に向けた教員の行動に関する研究—看護学実習における学生との相互行為場面に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 2001, 10 (1): p1-14
- [7] 三浦友理子, COVID-19 感染拡大下における看護学教育に関する官公庁等の動向と学生が認識した臨地実習での学習経験, 聖路加看護学会誌, 2021, 24 (2): p51-54
- [8] 齊藤みどり, 手島裕子, 川島一喜, 成人看護学実習 (慢性・終末期) 前のシミュレーション教育実践と効果, 帝京平成大学紀要, 2020, 31: p223-229
- [9] 岩鶴早苗, 水主千鶴子, 老人看護学における教育方法の検討—老人看護学演習と実習の関連について—, 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要, 2002, 5: p55-61
- [10] 中村令子, 中山裕子, 清水仁美, 高齢者疑似体験演習の学習効果についての検討—臨地実習での高齢者とのかわりからの評価—, 岩手女子看護短期大学紀要, 1998, 6: p9-16
- [11] 宮路亜希子, 大淵律子, 平松万由子, 高齢者疑似体験演習を生かした老年看護学実習での学びに関する検討—学生の記録の分析を通して—, 三重看護学誌, 2008, 10: p13-22
- [12] 高岡寿江, 石堂たまき, 藪下八重, 新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い, 佛教大学保健医療技術学部論集, 2021, 15: p55-68
- [13] 細谷俊夫, 奥田真丈, 河野重男, 今野善清, 新教育学大事典, 1, 第一法規出版, 1990: p379